

今思うこと

前生徒会長

田村和也

(百十六期)

大学入試センター試験まであと百八十数日です。私の教室の右側にある黒板に書かれたセンター試験迄のカウントダウンを見て、改めてこの学校を巣立つという感じます。考えてみれば卒業迄はもう十月月も無いのです。

さて、私は今ようやく生徒会長という立場も終え、受験勉強の真つ最中です。早くも「あのころやっておけば」と後悔先に立たずの状態です。今想うと「こんなに自分の事だけで精一杯なやつがよくも生徒会長などを務めたものだ」

と苦笑するばかりです。今思えば、共学化と服装自由化、その上週休二日制などに振り回されっ放しであったと思われれます。そんな生活の中で私が今一番感じることとは、何というか「喪失感」であるように思われます。

その理由の一つとして、やはり冒頭に挙げたように「受験」ということから「卒業」ということが思いやられるからです。出会いがある以上別れはやってくるものですが、やはりそこに「喪失感」や「寂寥感」はやってきます。

また、もう一つ、男子校である安積高校が無くなってしまったさびしさということがあげられます。私は一年間しか男子校時代を経験していませんし、また共学化して今更何を言っているんだと思われるかもしれませんが、確かに私には何かが変わってしまった感じがします。共学化前は「共学になっても安積は安積なんだし時代の流れだから仕方ない。」などと思っていたのですが、全くそれとは違う感じとなっていました。少しOBの方たちが守ろうとしたものがわかった気がしました。歴史や伝統などではなく、何かもつと私たちに共通な何かを失ってしまった気持ちです。

—— 共学後の歩み ——
とはいうものの、共学後私たちは確実に前に

進んでいかななくてはいけない訳です。共学化を期に日常に埋もれていた今までを変えることを目標としました。規定も変え服装も自由化しました。しかしそれらはあくまで変化の表層であり本質ではありません。本質とは、私たち自身が日常にうもれず前進していくことだと思います。共学化をしたという段階で留まらずに、共学化を期に更に発展してこそ、共学化の真の成功といえるのではないだろうかと思いました。

—— これからの安積 ——

それではこれからの安積には何が必要か。それは開拓者精神ではないだろうかと思いました。私は、この「開拓者精神」というものは今、私たちが持ち得る知識や道具を有効に使い、文字通り道を切り拓いてゆこうとする精神だと思えます。私たちが卒業すれば、男子のみという学年は無くなり、より完全に共学となる安積高校ですが、姿は変わっても、それを形づくる本質は変わらずに連綿と伝えられてゆくものだと思います。今、この瞬間にも歴史が生まれ、伝統が積み重ねられているのです。そして私たちはそれらを次の後輩へと受け継いでゆくのです。

これからの安積に期待をしつつ、卒業までの学校生活を楽しく過ごしてゆきたいと思えます。

体育祭から紫旗祭へ

現生徒会長

田中俊旭

(百十七期)

今年は、例年九月に行われていた体育祭が、六月に開催されました。変更された理由は、体育祭存続を願う強い生徒達の意志によるものでした。変更に至るまでの経緯は以下の通りです。

周知の様に、今年度から完全週五日制が実施されたため、例年と同様の学校行事を行ってはいけません。授業時数の確保が困難になるという事態が生じました。そのため、職員の間では、学校行事を縮減する方向で検討がなされました。体育祭もその候補にあがり、紫旗祭が開催される年の在り方が、廃止を含めて検討された様です。しかし、生徒達が体育祭を、クラスの団結力・協調性を高めるためには外す事のできない行事であると考え、二期後半の授業時数が確保でき、且つ前述の目的を達成するにも、より有効である二期前半へ体育祭を移行する旨を提案しました。様々な学校行事・部活動大会と重複しない様に日程を調整した結果、六月二十五・二十六日の二日間で行う事が決定されました。

今回の体育祭を実施する上で工夫したのは、

従来の男女別競技に加えて、男子生徒と女子生徒が共に参加できる種目を設ける事でした。その種目として、バレーボールが上がり、一・二年生のクラスで、男女混合バレーが行われる事になりました。

さて、体育祭初日の二十五日は、生憎の小雨模様でしたが、予定通り実施する事になりました。校庭では、ソフトボール・サッカー・女子ドッジボールが行われました。また、屋内の競技は、男女混合バレーを始めとして、バスケットボール・卓球等も盛り上がりを見せました。

続く二日目も、朝から雨模様。さすがに前日から降り続いた雨のため、グラウンドコンディションは最悪の状態でした。そこで、ソフトボールの続行を中止し、屋内で行われる代替競技で順位を決定しようという案が、教師側から出されました。しかし、本来の競技続行を願う熱心な生徒達が、自主的にグラウンドの排水や整備に取り組んだ結果、競技再開にこぎつける事ができました。また、サッカーも泥田の様なグラウンドで行われましたが、参加者の男子生徒達は、力の限りプレーしていました。一方、応援に回った男女のクラスメートは、傘も差さず、ずぶ濡れになりながらも、自分達のクラスの勝利を信じ、一生懸命応援していました。この様

に、悪天候の中で行われた体育祭でしたが、数々の競技で、各クラスが一丸となった様子を見る事ができました。

本校の文化祭である紫旗祭も、体育祭と同様に、クラスの連帯感を高める行事と言えます。何故なら体育祭は、各クラスが優勝を目指し、クラスメートが一丸となります。一方、紫旗祭は、皆で協力しあい、地域住民の方達が、楽しむ事ができるような仮装行列や、展示・催し物等を行います。その様な過程を経る事によって、仲間同士の連帯感を深め、自分達が「安高生」と言う実感を持つ事ができると思います。

さて、九月六・七・八日に開催される紫旗祭は、男女共学化・服装自由化という大改革が行われてからの、初めてのものとなります。生徒会でも、共学化になり、安積高校がどの様に変わったか、服装が自由化されるに至った経緯等を、多くの方々に理解できる様な展示発表を企画しています。また、各々のクラスでも様々な趣向を凝らした催し物等が企画されています。当日は「新生安積高校」の現在を伝えるべく、全「安高生」が一丸となった、紫旗祭への取り組みを見せる事ができればと思っています。

新・安高生として

渡辺亮平

(百十八期)

安積高校に入学してから、四ヶ月が過ぎた。

入学以前から、伝統があり、勉強の水準が高いというイメージを持っていたが、実際に入ってみると、予想していたよりもはるかに高く感じられる。個性的で、インパクトの強い先生によるスピーディーで充実した授業、厳しかった応援歌練習、そして諸々の生徒会行事等、中学校までとは何においても力の入れ様が違う世界を、この夏休みまでに体験することができた。

伝統という点に関しては、私達一一八期生は、共学化二年目という、安積高校の長い伝統の中で最大の転換期に入学してきた。私達新入生にとって、共学は言わば当然であり、全く抵抗なく受け入れることが出来たが、男子校の伝統を直接受け継いだ今の三年生とは、感覚の差があるように思われる。先日、ある所でたまたま安高の三年生の三人組と同じバスに乗り合わせたことがあった。最初は、どこの高校の人達か分

からなかったが、人もまばらな車内で、彼らの座席だけが華やかであった。とてもあけつびろげで開放的であり、言葉に出来ないような豪胆さ、飾らない率直さが伝わってくるような会話だった。そのうち、その華やいだ会話の中に、「安積魂」という言葉が聞こえ始め、その時、私は「ああ、これが安高生か。」と、自分も安高生の一員でありながら、妙に感銘を受けてしまった。しかし自分達の学年では、この豪放大胆な感覚は、明らかに変化しているように思う。

その昔、カラヤンがフルトヴェングラーの影響の色濃い、つまりは、ドイツという国にしっかりと根付いたベルリン・フィルに国際的、普遍的な感覚を導入したことがある。この改革については、カラヤンが亡くなって十年以上が経った現在でもなお、賛否両論があるが、結果としてベルリン・フィルは、多国籍化し、今日の音楽の媒体としてふさわしい、明るく透明な性格の楽団に一変した。また彼は、ベルリンに限らず、それまでの音楽界の基準をも一新し、全く新しい時代を拓いた。安積高校の共学化においても、同様である。男子校の豪胆さは、素晴ら

しいものであるが、学校は、その歴史を脈々と受け継ぐ場である以前に、社会と直接結び付いた場である。これからは、新たな時代の流れを構築すべく、これまでとは違った、より開かれて、透明で明るい校風を確立しなければならぬと思われる。今まで安高は、男子校であるというだけで伝統をつくってきた。これからは共学校である。ともすれば、他の何処にでもある共学校と変わりなくなってしまう。そういった意味でも、一一八期生の責任は大きく、一人一人が、楽な方へと流れず、これまで以上に、安高生としての自覚を持たねばならない。

さて、学力の水準ということでは、四ヶ月経った今、やはり範囲から優秀な人達が集まるといふことを改めて感じさせられる。安高に来た途端に、カルチャーショックを受けた人も少なからずいただろうと思う。勉強においては、自分は平凡な人間に過ぎないのだということに改めて悟らざるを得ない。しかし、ここで悲観的になり、諦めてはいけなと思うようになってしまった。順番は、相対的で、単なる目安に過ぎないもので、他者との比較の中では、自分の今の現

状と、到達点の差は見えない。大事なのは、到達点に、自分をどれだけ近づけることが出来るかということに尽きると思う。

また、学力だけで高校生活を送るのは、何かひとつ欠けているように思える。先日音楽の授業は、デュトワという人の指揮したコンサートのビデオ鑑賞だった。私は、彼一流の洗練された感覚に、いつもながら驚いてしまった。この感覚は、相当な感性、教養により裏打ちされているのだろう。また、私の友人の一人に、中国の漢詩に凝っている者がいる。先日彼から、中国では全ての漢字は発音が上がリ調子か平板かなどで幾種類かに分類でき、漢詩をつくる際にはこれらをこのように並べるのだ、と微細にわたり説明され、これもまた驚いた。漢和辞典の後ろに、そのような解説が付録としてひっそりと載っているのを知ったのもその友人による。私には、漢詩を愛で、更には自分でもつくりたい趣味は全くないのだが、見識者の話によって、大きく興味が湧き上がってくる。

そもそも、学生の本分である、勉強という観点からすれば、このような趣味やその他の雑多

な知識は、どうだって良いのではと言われるかもしれない。しかし、どうでも良いことでも、分かってくると面白い。新たなことを知ると、何か漠然と得をしたような気持ちになる。丸谷才一のエッセイはその良い例で、彼の話は、言うなれば酒の肴になりそうな知識の集積であるが、読後には何か心に残るものがある。知識人と呼ばれる人々は、そういったものを沢山抱えているのが常であり、そういったものによって、あれだけ豊かな文章を書き、豊かな人生を送っているのだろう。どうでもよいことなど侮ってはいけないのである。いろいろな知識は、一つのものをついていくような角度から眺める余裕を与えてくれる。例えば、アメリカ人はどういった人達なのかを考えると、キャリー・ネイション、アンディ・ウォーホル、ポール・ペレーといった人達を思い起こして、それらを結んで浮かび上がってくる像は、ただ言葉で説明されるのよりもずっと説得力を持っている。先日の学年集会で、梅田前校長先生が、「高い山を築く

ためには、その裾野は広くなければならない。」と言われたが、学生の本分は勉強であると言え

ども、それ以外の部分にも積極的に関心を向け、人間性を広くしていくことが大事だと確信した。そして、ここ、安積高校は、そのような人間性を形成することを後押ししてくれる学校であると思う。先生方は博識で個性豊かであり、授業の端々で話される、自らの体験や興味深い雑学の数々は、弥が上にも私たちの興味を駆り立て、授業へと引き込んでしまう。安高の先生方もまた、沢山の知識を抱えた知識人であると思う。また、桑野文庫には、古今の名作名著が並ぶ。これら、安高の環境全てが、私達がより高い山を築くことを可能にしてくれる。

大きな転換点を迎えている安高の一員として、私達一人一人が、この恵まれた環境の中で、自らの人間性を高めなくてはならないと強く感じている。そしてこの姿勢が、新たな校風の確立につながるものと思っている。